

付論3 東日本の弥生文化／朝日遺跡

黒沢 浩（南山大学人文学部）

はじめに

朝日遺跡は、いうまでもなく伊勢湾沿岸地域のみならず、中部地域^{（註1）}を代表する弥生時代の集落遺跡である。本稿は、この朝日遺跡が弥生文化、特に東日本の弥生文化を理解する上で、どのような意味をもつのかを概括的に述べることを目的とする。ただし、そのためにはいくつかの留保が必要であろう。

まず、「弥生文化」「弥生時代」という枠組みである。われわれが自明としているこれらの枠組みは、明治時代以降、近代考古学の中で設定されたものであり、今後有効な枠組み足りえるかは疑問である。

二つ目は、「東日本」という枠組みである。地質的には静岡一糸魚川構造線が、西と東を分けるラインだが、考古学を含む人文諸科学では、このラインよりもやや西側で、東と西を分ける場合が一般的である。最近では、「近畿」も「東日本」の範疇で理解すべき^{（註2）}という意見もあり、流動的である。また、所謂「東北」との境界に関しても問題が残る。

三つ目は、そうした状況を踏まえて、朝日遺跡の帰属に関する問題である。朝日遺跡は、「東日本」の遺跡なのか、「西日本」の遺跡なのか。しかし、実はこの問いは意味のあるものではない。われわれがどちらに含めようとも、朝日遺跡は厳然と存在する遺跡なのであり、その帰属はわれわれの認識の仕方ではない。したがって、本来的には上記のような枠組みに依らず、分析・記述をすすめるべきであろう。

そのことを示した上で、今回は朝日遺跡と所謂「東日本」の「弥生文化」についての比較である。ただし、実際には中部・関東の、それも前期・中期が中心となる点はご了承願いたい。

1 時間的枠組み

朝日遺跡が所在する濃尾平野の土器編年にかんしては、永井宏幸氏と村木誠氏がまとめられている（永井・村木2002）ので、それにしたがって、尾張をⅠ～Ⅶ様式の区分で理解する。このうちⅠ様式を前期、Ⅱ～Ⅳ様式が中期、Ⅴ～Ⅶ様式が後期として理解しておく。

これに対応する「東日本」の土器型式は必ずしも明確ではないが、大まかにⅠ期を尾張Ⅰ様式一条痕文系土器、Ⅱ期を尾張Ⅱ様式一平沢式系、Ⅲ期を尾張Ⅲ様式一池上式・中里式・小松式・栗林1式、Ⅳ期を尾張Ⅳ様式一宮ノ台式・小松式・栗林式、Ⅴ期を尾張Ⅴ～Ⅶ様式一久ヶ原式・吉田式・箱清水式ほか、として理解しておきたい。

2 集落の展開

「東日本」ではⅠ・Ⅱ期の集落遺跡は明確ではない。該期の遺跡の多くは墓地遺跡であり、居住域とされる部分にも遺構が明確ではないのが普通である。群馬県・注連引原Ⅱ遺跡や中野谷原遺跡を分析した小林青樹氏は、Ⅰ期の居住は短期的で移動性の高い小規模な集団で、Ⅱ期になって集住化の進む集団と相変わず小規模な集団とに分化するものとしている（小林2004）。妥当な見解であろう。

関東において、定着的・集住的な集落遺跡の出現はⅢ期である。神奈川県・中里遺跡（第1図①）、埼玉

県・池上遺跡（第1図②）がその代表であり、千葉県・常代遺跡では居住域こそ未検出だが、群在する方形周溝墓群のあり方からみて（第1図③）、Ⅲ期にはそのような集落が出現していたものと考えられよう。

池上遺跡では居住域を区画する溝があり、中里遺跡では集落域を河道で区切っている。しかし、この時期に、明確な環濠集落は出現しておらず、環濠集落の出現はⅣ期を待たなければならない。

Ⅳ期の環濠集落は、関東および中部高地において、概ね同じような現れ方をする。関東の宮ノ台式の集落では、環濠集落の盛衰のプロセスがほぼ一致しており、①小規模集団の定着 ②人口の増加による居住域の拡大と環濠の掘削 ③環濠の埋没と居住域の小規模化・分散化という経過をたどる。環濠とほぼ同時期に、環濠内に大型の方形周溝墓が1基構築されることもある（第1図④）。

関東の環濠集落の特徴は、その立地と形態、そして継続期間の短さという点に集約できよう。立地の点では、多くが台地上に占地しており、形態は濠1条である。そして、継続期間はほぼ土器1型式の中で終了する。立地条件を除いて、こうした特徴は中部高地でも概ね当てはまるようだ。

以上の点は、朝日遺跡と比較した場合、その違いは明白であろう。朝日遺跡は沖積地に立地し、環濠も多条化する時期がある。また継続期間は前期から後期と、ほぼ「弥生時代」全般にわたる。立地については、高蔵遺跡など台地上の環濠集落もあるが、それらは「東日本」同様、継続期間が短期間もしくは断続的である点は興味深い。いずれにしても、朝日遺跡の環濠集落としての特徴は、中部地方や関東とは差異が大きく、むしろ近畿以西のものに近い点は指摘できるであろう。しかし、中部・関東において、集落の定着化・集住化が進むⅢ・Ⅳ期は、朝日遺跡においても集落自体が大きく転換していく時期でもある。こうした動きと「東日本」の集落の動向が連動している可能性は、考えなければならない。

2 墓制にみる弥生中期の集団構成

中部・関東のⅠ・Ⅱ期の墓制としては、再葬墓が知られている。再葬墓は、葬送のプロセスに遺体処理を含むものとして理解されるが、関東・東北南部では壺を蔵骨器として使うことが多いため、「壺棺再葬墓」と呼ばれる（第2図①）。

関東や東北南部の壺棺再葬墓では、一つの墓坑に複数の蔵骨器を埋設している場合が多い。このような場合、一遺体に一棺と考えて、複数の人が一つの墓坑に埋葬されたとみるか、一遺体を複数の棺に分けて埋葬したとみるかで、その内容は大きく異なる。しかし、現状ではどちらも証拠がなく、また、全身の骨もそろわないことから、部分骨のみの埋葬であるということになる。

石川日出志氏は再葬について、集落遺跡のあり方との兼ね合いから、通常分散して居住していた集団が、同族意識を確認するために儀式であり、再葬墓はその共同墓地である、と位置付けた（石川1999）。これについては設楽博己氏も賛同しており（設楽2004）、妥当であろう。

さて、再葬墓は何も関東に特有なものではなく、東海地方にもみられる。縄文晩期には、田原市・吉胡貝塚や伊川津貝塚で確認され、かつては関東の再葬墓も東海からの波及であるとさえ言われたことがある。

東海で、縄文晩期から弥生初期の土器棺を使用した墓地遺跡としては、麻生田大橋遺跡の事例がある。麻生田大橋例を再葬墓と呼ぶかどうかは別として、土器棺を使用して墓域を形成すると言う点では共通している。ただし、麻生田大橋例を含め、東海では一墓坑に埋設土器は1つ（合口は一棺とする）が原則である点で、関東・東北南部の再葬墓とは異なり、多数の墓が群在して、明確な墓域を形成する点も異なる。

先に述べたように、関東・東北南部の再葬墓が小規模で分散的な集団の共同墓地であるとするならば、麻生田大橋遺跡の場合には、比較的規模が大きく、定着性の高い集団を、その背景に想定すべきであろう。このように見れば、東海の土器棺墓地は、それが再葬墓であろうとなかろうと、その構成原理において関東・東北南部の再葬墓地とは異なっていると言えよう。

もちろん、東海地方では麻生田大橋ほどの大規模な墓地を形成せず、もっと小規模な場合の方が多いため、これを普遍化することは危険である。しかし、少なくとも、Ⅰ・Ⅱ期の集団構成において、東海地方の諸集団の中に、関東・東北南部の集団よりも定着性・集住性が高かったものがあつた可能性は指摘しておいて良いだろう。そして、こうした集団構成がある程度達成できていたからこそ、朝日遺跡において、Ⅱ期に方形周溝墓の導入が可能であつたと評価できるのではないだろうか。

方形周溝墓の導入は、関東ではⅢ期であり、中部高地ではさらに遅れる。関東においては池上遺跡や中里遺跡のような、定着性・集住性の高い集落の出現と軌を一にする。中部高地では、長野県・伊勢宮遺跡で木棺墓群が確認されている（第2図②）。これらは再葬もしくは改葬された可能性が高いが、さらに興味深いのは、木棺墓群を区画する溝がありそうなことである（註3）。もし、そうだとすれば、方形周溝墓という形ではないにしろ、一定の空間を墓域として占地することはあつたのだろう。

定着性・集住性の高い集団には、計画された墓域が必要である。もちろん、墓域の構成原理そのものは、別な理解と説明が必要であるが、方形周溝墓導入の背景についてはそのように理解しておきたい。

3 手工業生産について

「東日本」では、具体的な生産活動を示す証拠がほとんどない。数少ない証拠としては、長野県・松原遺跡と榎田遺跡における磨製石斧の生産・流通体制の存在が指摘されている（馬場2004）。「榎田型磨製石斧」は関東にももたらされているなど（馬場2001）、広域に流通していたようだ。また、「榎田型磨製石斧」とは別に、在地石材での石器製作も明らかにされているが、そうした手工業生産は必ずしも「拠点集落」に集約されているわけではない。このように、「東日本」において、生産と流通を論じるには、未だ資料が断片的に過ぎるのが現状である。

朝日遺跡においては、石器・木器・玉の生産は確実であり、手工業生産がこうした拠点集落に集約されている状況を確認することができる。さらに、金属器生産については、今次調査において出土した銅鐸鋳型によってその蓋然性は高まった。

しかし、青銅器鋳型の出土例が多い北部九州では、鋳型だけでなく青銅器の鋳造関連遺物（例えば轆の羽口や埴輪など）がなければ鋳造遺跡とは認められない。こうした点を考えれば、朝日遺跡における中期（Ⅱ期）の銅鐸鋳造は、未だ蓋然性の段階に過ぎないとしておきたい。むしろ、今次調査における銅鐸鋳型と玉作り関連遺物との関係は重視されるべきかもしれない。北陸では、福井県・加戸下屋敷遺跡で菱環鈕式とされる銅鐸鋳型が出土しているし、福井県・井向遺跡では菱環鈕式を含む古式の銅鐸がまとまっていることから、銅鐸の成立に関して北陸もしくは山陰まで含めた日本海側の可能性を考慮すべきであろう。その意味で、北陸が主体となる玉作り関連資料との関係が重要なのである。

朝日遺跡では、中期段階での金属器生産の痕跡はほとんどみられない。しかし、後期以降、「東日本」に散発的にもたらされる青銅製品の製作地を考えたとき、やはり、濃尾平野はその第一候補である。その中

には、三遠式銅鐸も当然含まれてくる^(註4) のであり、この段階では、朝日遺跡は東の方を向いている。

おわりに

「東日本」と朝日遺跡について、ほとんど思いつきを書き連ねてしまった。

今回の銅鐸鋳型片の出土を契機として、「東日本」における青銅器のあり方について思いをめぐらしはじめたところであり、銅鐸鋳型にふれた部分はその考察の途中の一断片である。

「東日本」からみたとき、朝日遺跡は非常に「西日本」的な集落遺跡であるといえる。それは立地・継続期間、そして遺跡の構成要素のどれをとっても、以東の遺跡とは違う。しかも、興味深いのは、朝日遺跡を含む伊勢湾周辺地域が、中期まではどちらかといえば西——直接的には近畿——との関連が強いように思えるのに対し、後期以降には東との関係を強めるように見えることだ。

おそらく、その辺りに「西」でも「東」でもない、朝日遺跡を含む伊勢湾地域の遺跡群の動向が垣間見れるのではないか、と思う。

<註>

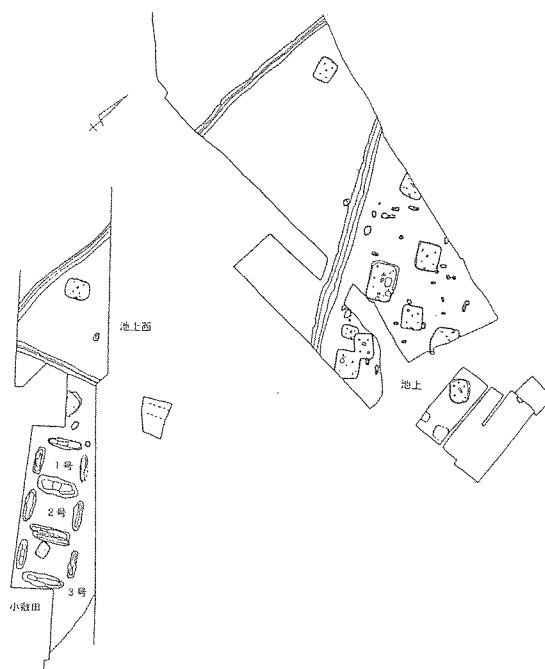
- 1) 「中部地域」という言い方には、静岡・愛知・三重・岐阜といった東海4県と、長野・山梨といった甲信地域、そして新潟・富山・石川・福井の北陸地域をまとめている。
- 2) 2004年の大学合同シンポジウム（於明治大学）での小林青樹氏の発言。
- 3) ただし、報告書には溝や土坑に関する記載がなく、時期の確定はできない。ここでは木棺墓群との位置関係のみから判断しているので、ここでの想定が誤っている場合は、当然あり得る。
- 4) 朝日遺跡では1988年の調査で、「土製鋳型」の可能性のある焼けた粘土塊が出土している（石黒・野口1990）。これを積極的に評価すれば、鋳造関連遺物ということになるかもしれないが、現状ではそこまでの判断はできない。

<参考文献>（個別の発掘調査報告書は割愛した）

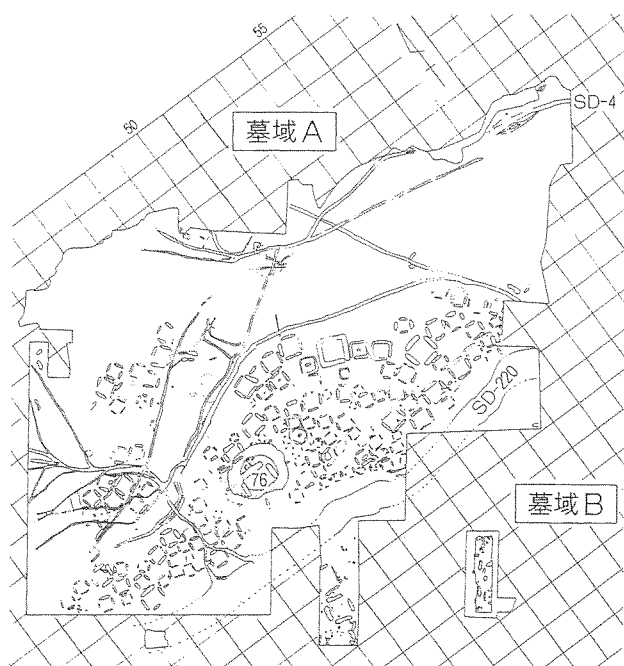
- 石川日出志 1999 「東日本弥生墓制の特質」『新弥生紀行』朝日新聞社
- 石黒立人 1996 「朝日遺跡の変遷過程を描くにあたっての二、三の問題」『（財）愛知県埋蔵文化財センター年報 平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人・野口哲也 1990 「朝日遺跡出土の金属器鋳造関連遺物について」『（財）愛知県埋蔵文化財センター年報 平成元年度』愛知県埋蔵文化財センター
- 伊丹 徹 2006 「弥生時代の「墓」という場」『墓場の考古学』第13回東海考古学フォーラム
- 黒沢 浩 2005 「南関東における弥生時代後期土器群の動向」『駿台史学』第124号 駿台史学会
- 小林青樹 2004 「農耕開始期の居住システムと住居構造」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集 帝京大学山梨文化財研究所
- 設楽博己 2004 「再葬の背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 国立歴史民俗博物館
- 戸田哲也 2000 「中里遺跡の調査」『平成12年小田原市遺跡調査発表会 中里遺跡講演会 発表要旨』小田原市教育委員会
- 永井宏幸・村木 誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 馬場伸一郎 2001 「南関東弥生中期の地域社会（上）（下）」『古代文化』第53巻第5号・第6号 財団法人古代学協会
- 馬場伸一郎 2004 「弥生時代長野盆地における榎田型磨製石斧の生産と流通」『駿台史学』第120号 駿台史学会
- 山岸良二・甲斐博幸・諸墨知義 1996 「千葉県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』同成社



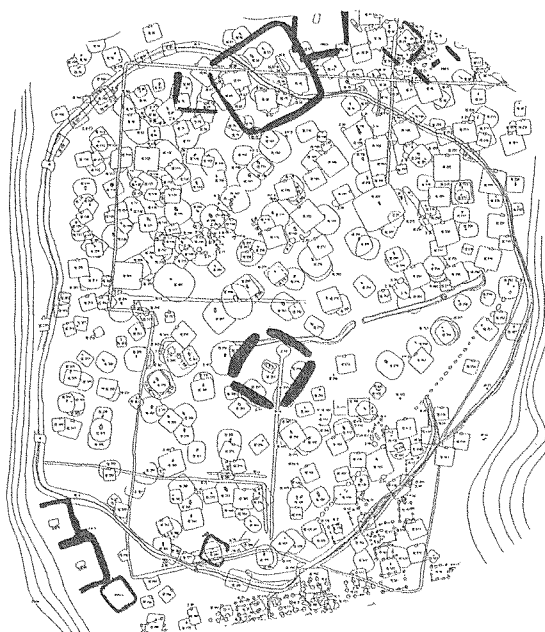
①神奈川県・中里遺跡（戸田2000）



②埼玉県・池上遺跡、小敷田遺跡
（伊丹2006を一部改変）

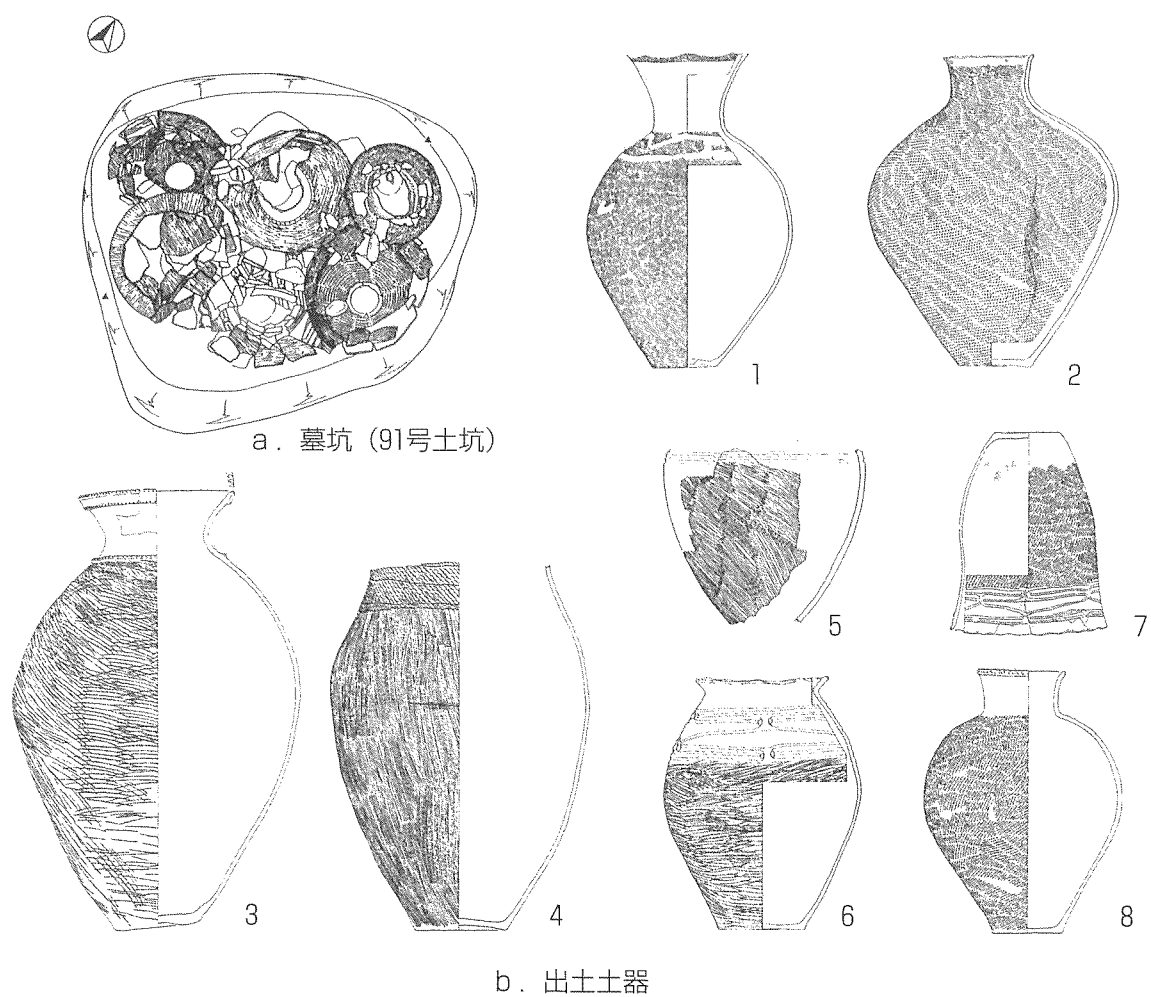


③千葉県・常代遺跡（報告書より）

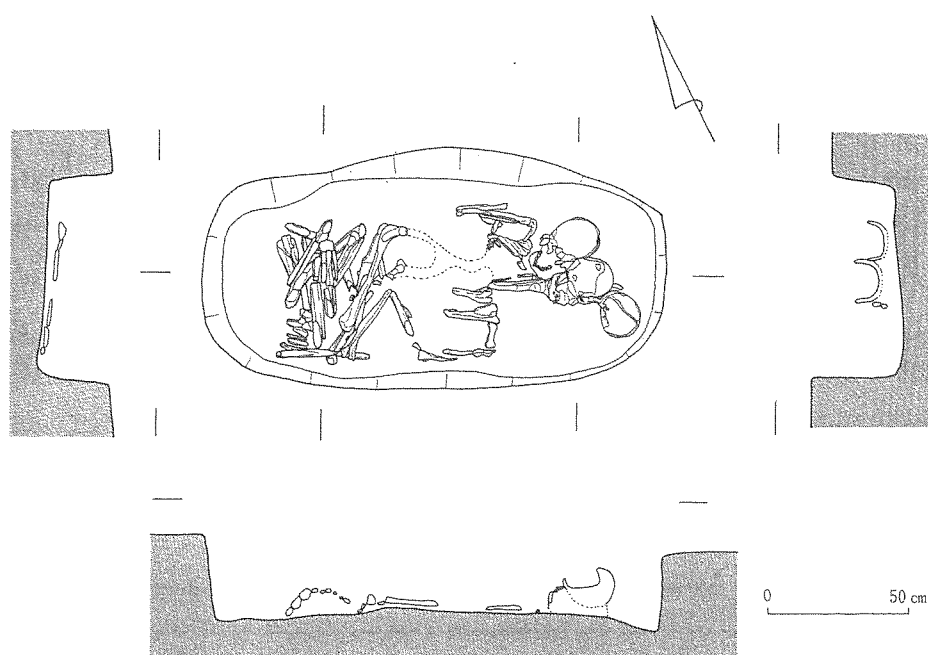


④千葉県・大崎台遺跡
（山岸・甲斐・諸墨1996）

第1図 集落遺跡および関連資料（スケール不同）



①新潟県・村尻遺跡の壺棺再葬墓（報告書より）



②長野県・伊勢宮遺跡の木棺墓（5号 報告書より）

第2図 壺棺再葬墓・木棺墓